

周代の均斉思想と救済制度(下)

趙 世 超
高 橋 庸 一 郎 (訳)

富裕者を牽制し抑制する手段の主なものはその田畑を奪うことである。これに関係する記録としてはすでに金文に見えている。たとえば『大簋』である。『詩経』にも、「我が田屋を徹し」及び、「女反^{なんじ}つて之を有す」といった嘆きの言葉がある。田を奪われた原因はかなり複雑な事情があるようではあるが、しかし富を抑えるということを、その原因の一つとみなすことは、さほどの間違いではあるまい。

春秋期の貧富の分化は一段と進んでいるが、しかし『左伝』、『国語』の二書に残されたものによると、救済制度の材料はかえって更に増えているということを反映している。

国家の救済が及ぶ範囲は甚だ広く、それが最も注意を引く点である。たとえば、晋文公は即位して後、「責を棄て斂を薄くし、舎を施し寡に分ち、乏を救し滞を振り、困を匡け無に資し」¹⁾、「懋なる穡は分つを勧め」たのである。晋の悼公は大夫に擁立されて国君となった時、「舎を施し、責を已み、寡鰥に逮^たばし」²⁾、「乏困を匡け、災患を救い」、「賦斂を薄く」したのであった。楚の令尹子重は陽橋の役たらんと欲して、先づ「戸を大にし、責を已み、鰥に逮^たび、乏を救^す」³⁾だったのである。呉国に対処する為に、楚の平王は、「然丹をして上国の兵を宗丘に簡せしめ、且つ其の民を撫す。貧に分ち、窮を振う、孤幼を長ぜしめ、老疾を養い、介特を收め、災患を救い、孤寡を宥し、罪戾を赦し」⁴⁾、「屈罷をして東国の兵を召陵に簡し、亦た之の如くす」⁵⁾るなど、すべて国家する救済の典型である。こうした措置は、一定の政治的目的のためのものであり、ある種の臨時的なものである。しか

しそれ等が引き起す作用は、やはり西周同様、過少評価すべきではあるまい。上述の晋の文公などのように、その中から非常に大きな利点を得た人々を除いた外にも、斉の桓公は、「賄を藏さず、欲に従わず、施舎して倦まず」⁶⁾によって覇業をなしとげた。また秦国の孟明は、「民に重施」⁷⁾して、ついに強国晋を打ち破り、崤の戦いで全軍壊滅という耻辱を雪いだのであった。呉王闔閭、越王勾踐もまた、「親を能くして施に務む」ことによって、それぞれ郢に入るということと、呉を滅ぼすという勝利を勝ち取ったのである。そして楚の国の子干は、「民に施すこと無」かったために、叔向は、彼は再び国を得るという希望はなくなったと断定したのである。こうした点から、救済を否定するか、励行するかは、即ち政治家の成敗のカギであったということが解る。

前掲の引用文に使われている施舎とは、施予のことである。王引之の『経義述聞』は、「古声の舎は、予に相り近し」と言っている。よってこの二字は通用可能なのである。責を棄て、責を已むの意味は、遅延遅滞の債務を免除することである。薄斂とは賦斂を軽減することである。乏を救い、災患を救い、乏困を匡け、困を匡けて無に資すは、貧に分ち、窮を振けとに関連しており、大体はみんな生活困窮者を救済することを指しているのである。鰥に逮^たばすと、鰥寡に逮^たばしめ、孤幼を長ぜしめ、老疾を養うとは、つまり恵を施し須に務め鰥寡孤疾に及び、以て天下の窮民の窮乏を訴える所無きものを免ぜしむるのである。介特は杜預『春秋左氏伝注』によれば、「単身の民なり」であり、

つまり家族の成員であったものが、それから離脱して、一人となったもののことである。介特を収む、とは国家によってこれをおさめ集めて拡散させないようにすることを指すにちがいない。外にまだ「分かつを勸む」というのがあるが、韋昭の『国語』注は、「勸は無に分かつ有り」とある。『左伝』僖公20年、魯の国の賢大夫蔵文仲も「勸分」して早に備えるべきことを提言しており、楊伯峻先生は、「勸とは、貯蓄した者が分ちて之を施すこと有らしめるを勧めるのである」といつている。いったい誰に対して、無き者に分ち施すことを勧めるのであろうか。

当然それは国の貴族に対してであり、各一族の大家長に対してである。困窮無告の者がますます増加して来る時期に、公室の力にのみたよれば、どれ程の負担になるかを考えてみれば、家長が收族を通じて動員することが依然として、しばらくは手離なせない手段であることが解ろう。『国語、晋語（四）』によれば、晋の文公が箕鄭に向って、飢を救う方法を問うたのに対して、箕鄭は、「民君心を知れば、貸なるも惧れず、蔵より出すも入るが如し、何ぞ置すること之有らむ」⁷⁾と述べている。その意味はただ国君に確かに民を愛する心があるならば、貴族達は生活に保障のないことを心配するということがなく、みんなは、「其の蔵に貯めてある財をすぐに出して救済に当てる」にちがいないし、財を分ち人に与えることを、自分の家に蔵するのと同様に見なし、国家も欠乏することを心配する必要がないということである。国家の救済は固より重要であるが、各族が一致してまともればその効果は更に大きくなるということが解る。『左伝』襄公九年、晋の悼公が鄭を征伐する戦いの前線から国に帰り、下臣と休養生息の策を協議して、「魏絳施舍することを請う。積聚を輸して以て貸し、公より以下、苟しくも積有る者は^{ことごと}尽く之を出せ」⁸⁾と、そして結局、「国に滞積無く、亦た困人無し」という状態になった。20年後、宋が飢饉におちいり、司城の子罕は平公に請うて、「公の粟を出して以て貸

し」、また「大夫をして皆な貸さしめ」、「司城氏貸して書せず」であり、そのうへ「大夫の無き者の為に貸し」て、その結果もやはり「宋に飢人無」からしめたのである。貸には二つの意味があり、一つは施し与えるの意味であり、『説文』は、「貸は施なり」と曰い、『広雅・釈詁』は、「貸は、予なり」と曰って、皆なその証しとなる。その二番目は、通常言う所の借貸の貸す意味である。晋国は魏絳が「施舍」を提議した時、「積聚を輸して以て貸」したのであるが、よって『左伝』の襄公九年の貸と施とは実際には異字同義の関係にあって、両者には本質的な相違があるわけではないのである。宋国のただ「司城氏貸して書さず」というのは数量を記述しなかったということを言っているのであって、償還することを求めないのである。そのほか貸という字はやはり償還を望むこともやはり指しているようであるから、貸というこの一字を借貸の貸と理解してもさしつかえないのであるが、しかしそれはさほどの高利で貸すのではない。高利で貸与することは、春秋期には一つの専用の言葉があって、「假貸居賄」（假貸して賄に居す）というのである。このやり方に熱情を燃す、貪婪でいやしい人は常に輿論の非難を受けることになるので、国君と執政の為に、公けに提唱することは不可能であったのである。故に借貸はすでに施予と同じではないが、もし借貸の意味のとうりであるとすれば、それは收族の発展であり、その延長されたものと見なすことが出来る。こうした、国君によって組織を統一し、貴族の出資によるやりかたは、たしかに各国が難関をのり越えていくのに最も便利であり、政治的支配を安定させ、それによってまた人々の普遍的な重視を受けることになるのである。

勸分（分けることを勧める）の語は我々に弁債や已債の語を思い起こさせる。これは結局人民の政府に対する遅滞延滞を免除することであり、更にまた貴族がたまった債務を強制的に取り立てる権利を放棄することであり、この点は更に一歩すすめて研究する価値あるものであ

る。梭倫（古代ギリシャの政治改革家 Solon）は改革の過程で「解負令」という債務取り消しの方法を取ったことがあったが、弃債、已債は春秋期の一つの重要な政治的措置であり、その性格は梭倫の解負令に類似していないだろうか？

その他、春秋人はやはり「矜窮を礼賓」することを「礼の宗なり」とみとめていた。楚の莊王は「能く旅人をして施舎することを有ら」しめたが、士会は彼を「礼に逆らわず」と称賛した。これに反して、單襄公は路を陳国にとった時、そこに意外にも旅人が宿泊する旅舎がないのを見て、すぐに陳の政府の腐敗を推測断定して、「陳侯に大咎有らざるも、国必ず亡びん」と言っている。こうした事例は西周の旅客の面倒を見るという一連の制度もまた春秋期まで維持されたということを反映している。また『左伝』昭公18年によれば、宋、衛、陳、鄭はかつて同時に火災が発生し、鄭国の子産は、「焚室を書して其の征を寛め、之に材を与⁹」え、宋、衛みな類似の措置をとったのであるが、これは各国が西周期と同様に、まだ各種の不慮の災害に対して、時に則応した救助をすることを重視していたことを説明するものである。

一家をまとめるということを家施と言った。「礼に在りては、家施は国に及ばず」¹⁰と『左伝』の昭公26年の晏嬰の言葉にあり、国君が收族をよびかけるといのは、もともと家長が各々自からの族人を救けて、それによって国家救済の重要な補填とすることにあつた、しかし歴史の発展にしたがつて、ある一部の貴族は無制限に家族の範囲を拡大発展させて、だんだんと国にまで及ぼし、卿大夫の家の勢力がかえって壮大となっていったのであつた。前述の子罕は能く施すばかりでなく、「施して徳とせず」、また賜を受けた者からの報答を求めなかったが、それによって罕氏はまもなく宋国の強宗となったのである。宋国と隣接した鄭国には、その名を子皮という一人の貴族がいたが、彼は大飢饉の年に乗じて、「国人に粟を餼ること、戸に一鐘」¹¹であり、これによって「鄭国の民を得」、以後

彼の家族もまた「常に国政を掌どった」のであつた。子罕と子皮はまだ比較的隠当といえるが、しかし¹²齊国の公子商人と宋国の公子鮑意は貸し出し用の粟を利用して、国人に与えるという方法で謀って君位を得たのである。春秋後期には、国家による救済はだんだんとすたれていき、「公は朽蠹を聚め、三老は凍餒餒える」にまでなり、多くの大族はまた激烈な政争の中で邑や分室をうばわれ、これ以後收族のより所が失われてしまうことになったのである。そこで大量の貧困化した家族の構成員達はドツと社会にほうり出され、少数のものは依然として旺盛に発展中の大夫に身を置いて、チャンスに乗じて分かち施しては民衆を争奪し、分施はますます公室との争奪の道具となっていくのである。その中で最もぬきんでているのは、我々もよく知っている陳（田）桓子である。彼は式微の公子公孫に対して「私かに之を邑・国の貧約孤寡なる者に分ち」¹³、則ち「私かに之に粟を与え」たのである。また容積の比較的大きな自分の家の梲ではかつて貸与し、容積の比較的小さい公認の梲で返してもらうことを公言したが、はたして人々に、「之を愛すること父母の如く、之に帰すること流水の如く」¹⁴に親われた。その孫の田成子に至って、桓子の政を再び実施し、多くを貸して少きを返してもらうことにしたので、ある人は、「嬭は芑を采り、帰するは田成子」¹⁵であつたという。いく代かの経営をへて、ついに田氏は齊にとって代ることを完成させたのである。そのほか季氏のごときも、魯の昭公を追い出し、また三家が晋を分つなども、これ等と類似の方法を取つたのである。「家施は国に及ばず」から、家施国に及ぶに到ることは、実は春秋歴史上の一大政治的変動だったのである。国家が剥奪して富裕者を抑制するという例は春秋時期にも常見され、子産は「大人の忠儉者は、従つてよつて之に予え、泰侈者はよつて之に斃る」¹⁶ように対処した。衛国の公叔戌は「其の富を以つて」¹⁷逐われ、鄭国の嬖大夫駟秦は「富にして侈」¹⁸なるが故に「鄭人悪みて之を殺」したのである。晋国の欒、

卻が六卿に先んじて亡びたのも、彼等の「食欲にして無藝」「假貸居賄」と関係があろう。しかし私有制度の発展は既に徐々に巨大な浪となつて、人為ではもう制限出来ない程になつていったのである。

戦国時期は、救済制度はひきつづき存在していた。しかし国施であろうと家施であろうと、事実上は両者ともすでに接近していた。梁の恵王は、「河内凶なれば、則ち其の民を河東に移し、其の粟を河内に移す。河東凶なれば亦た然り」¹⁹⁾ということをする事は出来たけれども、所が「途に餓^{みち} 孥^{うえじにびと} 有りて発するを知らず」であつたが、その人は死ぬ時に言ったという。「我に非ざるなり、歳なり」と。魯の国の子柳は母を喪^{なく}し、彼は「賻^{こうでん}布の余」²⁰⁾を以て兄弟の貧者にこれを調達してやつたところ、親族兄弟の激烈な反対にあつたという。²¹⁾齊の国の黔敖は大災の年に路上で飯を食べていたが、かえって飢えた者がやって来て食するのを見てなげいたという。謹嚴なる救世主のすがたとして、「施して徳とせず」の気配はどこにもない。衛国の公叔文子がかつて「粥を国の餓えたる者に与え」²²⁾たが、死後衛侯によって^{おくりな}謚^{おくりな}が与えられ恵と曰つた。しかしこれ等は已に鳳の毛、麒麟の角のようにめづらしい事に属していたのであろう。『管子・問』篇に、「死事の寡餼を問う、廩なるか何如?」「国の人を棄つるを問う、何族の子弟なるや?、郷の良家を問う、其の収め養う所の者は幾何人なるか?」、また「宗子の昆弟を収める者を問う、食を以て昆弟に従う者は幾何の家か?」と。これ等は多分まさしく国家の救済と、収族制度がすでに消滅しようとしていた為に、作者はこのような調査の項目を案出して、新しく出現した社会問題をすべて支配者の前にならべようと意図したのである。

現実の状況と相反して、戦国期からはじまって続々と編集された礼書の中では、救済制度はかえってますます完成度を加えて来た。『周礼』の中の『天官、小宰』は、「斂して之を施す事」²⁴⁾があるが、それをつかさどり、『秋官、大司寇』は、「肺石を以て窮身に達し」²⁵⁾ま

た専門に「遠近惇独老幼」の訴えをききとるのである。また土師は国が凶荒に遇した時には、責任をもって「民を移し財を通す」のである。そして『地官、大司徒』は民の災害危難を相い^{うれえ}憂恤^{うれえ}んとするばかりでなく、利を散ずること、徴を薄くすること、刑を緩るやかにすること、力(繇役)を弛くすることなど十二の「荒政」を通じて万民の心をまとめ、また幼き者を慈しみ、老いたる者を養い、窮^{すく}を振^{ゆる}い、食を恤^{やまいある}え、疾^{ゆる}を寛くし、富を安にする(繇役のかたよりを平等にする)などのいわゆる「息で保つ六項目」を通じて、「万民を養」い、救済の必要性のとりわけ大きい所へ及ぼすのである。またその下には遂人、遂師、委人、廩人、倉人、司稼、遺人などの職を設け、或ものは^{あまね}「万民の食を均しくして、その急なるに調くするのを掌どり、或ものは「邦の委托で蓄積したものを以て恵を施すことを行うことを掌どり」、或ものは各種の「蓄積した物資」を斂め取って以て賓客を供応し、各地を渡って歩く旅人を救助することを掌るが、これ等はすべて救済と関係のあることである。養老、分食、救荒及び「鄙食を設けて路を守る」などの処置は、この書の中では、いままでなかった程に整備され、統一された形に変っている。

簡単に解することは、この『周礼』の作者は伝統的な救済方法に対して整理と帰納的な考え方を加えて、更に自分の理想と緻密な構想を加味して、一連の相互に均衡のとれた救済方式を案出し、それを全体的な建国大綱の一部としたのである。しかしその中のいくつかの点は、戦国期の社会的発展の新しい成果を多分にくみとっているのである。例えば、「旅師は野の糶粟を聚めることを掌り」²⁷⁾「以て劑を質して民に致し」「春に頒して秋に之を斂む」、遂人は、「糶を興して厖を利する」ことを掌るが、これ等はすべて農民に収穫の時に粟を出させて、里社の合耦の処に儲め、各々に契約券を発給して、飢饉の年に、或いは春耕の期間に、その券によって粟を放出するのであるが、江永はこういった類のものは隋唐の社倉、あるいは義倉と同じで

あるといっている。その外、春秋期以前に於ては、国君はいつも家長によびかけ一族を結束させ、一族を恤えしむのであるが、『周礼』というこの書は、かえって民を教育して自からお互いに恤えあうことを強調しており、「五家を令て比と為し、之を使って相い保たしめ、五比を閭と為し、之を使って相い受けしめ、五閭を族と為し、之を使って相い葬せしめ、五族を党と為し、之を使って相い救わしめ、五党を州と為し、之を使って相い^{あまね}闡くせしめ、五州を郷と為し、之を使って相い賓せしむ」²⁸⁾とする。相い恤うことの出来ない者に対しては、刑罰を以て対することさえあるのである。もし一族の解体ということが無ければ、一つ一つの家庭の一般化という事実、こうした変化もまた発生し得ないのである。理想的要素を除去してしまうと、『周礼』がまさしく証明しているように、国家救済と収族制度の凋落にしたがって、里社を単位とする民間の互助自救は戦国期にはすでに主要な地位を占めてしまうのである。

『礼記』や『呂氏春秋』『管子』などの書の中には救済制度に関係ある材料が非常に多く、もし仔細に検討していけば、救済制度がすでに朝民間の互助という方向に転化していつているという証拠をさがし出すことも出来る。

戦国時代はやはりまだ「先づ富有りて而る後に譲を推す」²⁹⁾であるが、儒家は礼を用いて富裕者の悪徳的發展を制限することを提唱したが、しかし政府はすでに何の現実的な処置もとらなかったようであり、故に儒者自身でさえ慨嘆して、「此を以て民を防げるは、民猶義を忘れて利を争う」³⁰⁾と言っている。此と同時に、それぞれの労働者はすでに本当の支配基盤となっていることによって、政治家達の注意力も富を抑えることから土地を均等化し、繇役を均等化し、賦税の上限を均等化する方向へ転化していくのである。そしてついには割り当労役の時に、富裕者に対して、「専らには取らざること」を主張するのであるが、これも戦国期になってはじめて出てきた一つの新しい現象である。

三. 余 論

均等というのは本質的には原始共産制に属する伝統であり、故に先秦思想家の均等について言及するときは、だいたい堯舜について祖述するのが普通である。しかし「奴隸制と農奴制はあの部落制を基礎にしたところの所有制が更に一步発展した形態にすぎない」³¹⁾のであるから、厳密に言えば、私有制の完成された形態は資本であり、資本が歴史を支配するようになる時代より以前では、原始共有制はまだちがった形式で、異った程度にたもたれていた。通常、財産の私有と階級的対立を文明社会の基礎とみなすのは、抽象化を経て理性的な段階に到達した認識であり、それによって、またそれは一つの理論上の典型的概念であるから、我々は全くその正統性を疑うものではないが、しかし事実上、具体的なありかたはかえって複雑多岐にわたっている。周について論ずるならば、その所有制の形態は私有制というよりもむしろ私有制が当時おこした主導的な作用の一種の経済的構成部分でしかない。完成された公有制はすでに破壊され、完成された私有制はまだ最適な形にまでは到っていない。すなはちこれが周代経済史を把握するうえでのカギとなる認識である。結局こうした観点から考えを押しすすめていけば、均等思想と関係ある制度の長期的存在もまた、理にかなっていることになる。

周代の均等思想を実践していく手段の一つは救済である。救済の核心は収族であり、当時の人はそれを家施と称したのである。外にまさしく周という国家が民族的な機構の中から生れたように、国家による救済もまた家施の変化によって成立したのであり、結局は家施の拡大と発展であると思ふことが出来る。この点から、周代の救済制度を貫くものは血縁関係であって、階級関係ではないといえるのである。食料と財産を貸し与えて償還されることを求めない、あるいは多くを貸して少く返させる、ということは、「完全な覚醒的で実務的で、しかも

世俗的な」資本主義的商業の観点から見れば、全く理解出来ないことであるが、しかしかえって古代人は血縁関係を宗教的な意味を持った権威であると考えていたから、当然一族の者のめんどろを見ることを絶対的な義務としていたのである。一族の内部にはすでに分化と奴役的な労働とが存在していたから、これは誰にでも解ることであるが、その主なものは、その一族の長の一族の財産に対する管理権は支配権となり、あわせて一族の下層の構成員と一族内の奴隷的余剰労働を搾取するといった点に表われるのである。しかしこうした階級関係はかえって、血縁関係を出発点とする収族制度に血縁という一枚のペールがかかっていたために、またそれによる温情の中での脈々とした変化であったために、人にあまり気づかれなかったのである。早期文明が保持しているところの、中後期文明とは別の主要な特徴が、或いはここにあるといえるかもしれない。

周代には国野制度があり、奴役は国の中の各一族の内部に存在していたばかりでなく、国人と野人の間にも存在していた。国と野との関係は、二つの地区、二つの血族集団の間に形成された支配と搾取の関係であり、こうした統治を長期に持続させようとするならば、まず国人集団の相対的な安定を保持しなければならない。西周期、春秋期の救済はただ国に及んだだけで、野には及んでいないのであるが、これは明らかに国人の貧困による流亡離散、また負債によって奴隷に身を落すことを防ぐためであり、これによって国家を外敵のあなどりに十分対処出来るようにし、そして野人を威脅するのに十分にしていって且つ必要な兵源を掌握することが出来るようにするためである。棄債、施舍、薄斂などの措置はだいたい政治的変動の重要な時期、或いは大規模な戦争の前などに発布実施されているが、このことは前述の論点に確証を与えるものである。この点から見れば、均等思想と救済制度の存在は、旧社会の伝統的遺留物というだけでなく、やはり周代の現実的な政治的要求でもあったのである。まさしく国人の団結と一致は

国家繁栄の基礎であったから、故に周人は強力に富裕奢侈を批判攻撃して節約を提唱し、そのうえ施恵、恤民を称讃し、徳としてそれを普遍的倫理の高みにまでもち上げたのであった。

しかし私有制の発展と貧富の差の断えることなき進展は歴史的必然である。戦国期になると、国野の間の経済的関係は日ましに密切なものとなり、大血縁集団の解体と人口の複雑な流動によって、国野の境界線はついには消滅してしまうのである。「国に在るを市井の臣といい、野に在るを草莽の臣と曰い、皆庶人を謂い」³²⁾、領内の民はすべて国家の為に兵役と賦税を提供すべく、戸籍にくみ入れられた一般人民であると思なされるようになったのである。しかしそのかぎりに於て国人はこれによって部族の構成員を支配する資格を失ってしまい、それによってまた国君或いは族長に施予することを要求する根拠もまた失ってしまったのである。こうして伝統的な均等思想と救済制度は当然のことながら、風前の灯の如き末路へたち到ったのである。戦国期の諸子は依然として均等を鼓吹し、或る者は現実に対する反感からそれをとねえ（莊子）、或る者は現実には合わない幻想からそれを唱え（墨子）、またある者は古い皮袋に新しい酒を入れようとするなど、それぞれがその必要に応じて伝統を利用しながら、封建国家を設計する為の自から最もよしとする支配方法を採用したのである（孟子、《管子》、商鞅）。しかし鋭敏な思想家はすでにここで批判の大旗を高々とかかげたのである。

荀子は指摘して「均等に分ければ、平らにならず、^{ひと}齊しきを執れば同一ではなく、みな齊しくすれば使えず」³³⁾と言っているが、これを換言すれば、「齊を維持して齊に非らず」で、一途に均等を追求しても、反って不均等を造り出すことになるということである。彼の理由は、「位齊に^{おもひ}勢ければ同じきを悪まん」と欲し、物澹なること能はざれば則ち必ず争い、争えば則ち必ず乱る、乱れれば則ち窮す」³⁴⁾、よって「礼義を制して以て之を分ち、貧、富、貴、賤を有らしむるなど、以て相い兼臨するに足らしむ」

るよう主張するのである。あわせてこれを「天下を養うの本」と見なすのである。彼はまた言っている。いわゆる「至平」とは、「農は力を以て田に尽し、賈は察を以て財に尽し、百工は巧を以て機器に尽し、士大夫以上公侯に至るまで仁厚知能を以て官職に尽さざる莫し」³⁵⁾と。等級の名分既に定まり、貧富貴賤各々その位に安んずれば、「或もの天下に禄して自から以て多くなさず、或もの門を監し、旅を御し、関を抱き^{ひようしき} 柝」を撃つも、自から以て寡しとせず」なのであると。表面上の上下の不均等は、反って最大の均等であり、表面上の不画一は、反って本当の画一であり、荀子はくりかえし「不均等」を以て「均等」に代えるよう強調しているが、それはもとより、自分の礼制学説の為に理論的根拠を作っているのである。しかし同時にまた私有制と貧富の分化の発展に対して情熱的な称讃と肯定を提示しているのである。

韓非子は荀子の均等に反対する思想を継承し、更にそれを発展させて施す^{ひと}と救済にも反対した。彼は、「今それ人と相い若しければ、豊年の旁入の利無く、ただ完給のみを以てする者は、非力なれば則ち儉なり。人と相い若しければ、飢饉疾病禍罪の殃^{わざわい} 無く、ただ貧窮を以てする者は、侈に非ざれば則ち惰なり」³⁶⁾「侈にして惰なる者は貧なり、しかして力めて儉なる者は富む」かぎりは則ち「今上富人より徴斂して以て布きて貧家に施せば、是れ力儉を奪ひて侈惰に与うるなり」、「貧国に施する」は功無き者に賞を得さしめるに等しく、そうなると、「民の疾作を^{もと}索めて節用せんと欲する」も「得可からざる」なり。韓非子は貧富の差を作る根源を侈惰と力儉に帰しており、貧富間の搾取の関係は完全に抹殺しているから、その誤りもまたはっきりと見てとれる。労働者の疾病や苦しみに対しては漠然とさせているので、どうしても冷酷すぎる点はまぬがれ得ない。しかし其の学説の出発点は私有制に対する全面的な肯定であり、我々は、彼は荀子と同様に進歩的な歴史観を持っていると認めざるを得ない。

均等思想及びそれに関係する諸制度の長期に

わたる存在は、原始から伝統的にのこり伝えられて来たものではあるが、またこれは周代では現実的な政治上の要求となり、更にまた社会の富が貧窮に相対した結果でもある。生産力が発展し、財貨が蓄積され増加し、私有制が成熟すると、それにしたがって均等もまた社会の批判と冷淡さに直面することになり、それ等もまたすべてそれなりに理にかなっており、今日に至るもなおかならずそれを一種の歴史的進歩とみなさなければならないものであろう。しかし戦国期から始った急速な経済的發展も、依然として極めて大きな限界があり、「完全に自覚的で実務的で、しかも低俗な」資本階級をつくり出すにはまだまだほど遠いものではあるが、しかしそれが、均等思想に地盤と土壌を用意したのである。秦朝滅亡後、かつては秦の始皇帝によって立派であると認定された法家の学説は、ただ利害だけを云々して、道徳には目もくれないという弊害を暴露され、かたよった考え方から自由経済を抑制した儒家はかえって道徳を尊崇するという旗を打ち振って、民間から天子の殿堂に登り、田の所有を制限し、奴婢の所有を制限し、商工業の活動を制限して、またまた漢代の世論の中心になったのである。漢代の儒家は法家の合理的な核心部分を吸収し、漢代の支配階級もまた、法家理論に基づいてうちたてられた「秦制」を継承し、その基礎の上に、道徳教化を重視したのである。しかしまだ必ずしもよい事とは認定されている訳ではないところの、ただ政治で経済を規制するという政策を協調しすぎて、経済に束縛をもたらしただことは否めない。以後の封建社会が終始、戦国時代のような活発な躍動性に欠けているのは、このことと無関係ではあるまい。

社会は「一つの新しい進歩があらわれると、必ずある一つの神聖なものに対する冒瀆であると批判され」³⁷⁾「階級的対立が生じて以来、まさしく人の劣悪な情欲——貪欲と権勢欲が歴史の発展の根幹であった」のである。しかし歴史的唯物論者は伝統的な均等思想の衰微に対して残念がる必要は全くないし、ましてそのことが

後世にもたらした不利な影響についてはいわずもがなである。ただ同時にまた、均等は戦国時代には部分的に民間に入り、また国家による救済と家長により収族はある一定程度に於て転化して里社成員の互助自救となり、以来何百年何千年の発展を経て、ついには我国の労働人民の一つのすぐれたよき伝統となったということをのびがしてはならない。マルクスはロシアの農村共同組織体について論及した時、「それは資本主義制度を経ないカフティン峡谷の可能性である」とし、「資本主義制度の一切を享用し、その成果を肯定する」という前提のもとで、それを「ロシア社会の新生のための支点」に作り変えたのである。エンゲルスもかつて熱烈にそれを希望したことがあった。つまり「未来の連合体」は、資本主義的商業社会の自覚を、「古代の連合体の共同の社会的福祉に対する関心にむすびつけば、自己の目的に到達出来るのだ」と。この言葉は我々の均等と、それが民間にのこしている風俗習慣としての伝統に対して、たしかに重要な示唆を提示しているのである。

注

- 1) 『国語・晋語四』に、「棄責薄斂，施舍分寡，救乏振滞，匡困資無」「懋穡勸分」とある。懋穡は豊にみのった作物のこと。
- 2) 『左伝・成公十八年』に、「施舍，已責，逮寡鰥」「匡乏困，救災患」「薄賦斂」とある。
- 3) 『左伝・成公二年』に、「大戸，已責，逮鰥，救乏」とある。
- 4) 『左伝・昭公十四年』に、「使然丹簡上国之兵于宗丘，且撫其民。分貧，振窮。長孤幼，養老疾，收介特，救災患，宥孤寡，赦罪戾」「使屈罷簡東国之兵于召陵，亦如之」とある。介特は『集解』に、「单身民也」とある。罪戾は罪過のこと。『左伝，莊公二十二年』にも、「羈旅之臣，幸若獲宥及於寬政，赦其不閑放教訓，而免於罪戾，弛於負擔，君之惠也」とある。
- 5) 『左伝・昭公十三年』の叔向の言葉に、「不藏賄，不從舍不倦」とある。
- 6) 『左伝・文公二年』に、「重施于民」とある。
- 7) 『国語・晋語（四）』に、「民知君心，貧而惧，藏出如入，何匱之有」とある。
- 8) 『左伝・襄公九年』に、「魏絳請施舍。輪積聚以貸。自公以下，苟有積者，尽出之」「国無滯積，亦無困人」「出公粟以貸」「使大夫皆貸」「司城氏貸而不書

- 「為大夫之無者貸」「宋無飢人」とある。
- 9) 『左伝・昭公十八年』に、「書焚室而寬其徵，与之材」とある。徵は、『集解』に、「徵，賦税也」とある。
 - 10) 『左伝・昭公二十六年』に、「在礼，家施不及国」とある。
 - 11) 『左伝・襄公二十九年』に、「餽国人粟，戸一鐘」「得鄭国之民」「常掌国政」とある。餽は贈送すること。
 - 12) この話は『左伝・文公四年，文公十六年』の条に見える。
 - 13) 『左伝・昭公十年』に、「私分之邑，国之貧約孤寡者」「私与之粟」とある。
 - 14) 『左伝・昭公三年』に、「愛之如父母，而婦之如流水」とある。
 - 15) 『史記・田敬仲完世家』に、「嫗手采芑，婦乎田成子」とある。
 - 16) 『左伝・襄公三十年』に、「大人之忠儉者，從而予之，泰侈者因而罷之」とある。
 - 17) 『左伝・定公十一年』に、「以其富也」とある。
 - 18) 『左伝・哀公五年』に、「富而侈」「鄭人惡而殺之」とある。
 - 19) 『孟子・梁惠王上』に、「河内凶，則移其民於河東，移其粟於河内，河東凶亦然」「途有餓殍而不知殯，人死，則曰，非我也，歲也」とある。餓殍とは餓死者のことである。『後漢書・仲長統伝』に、「坐視戰士之蔬食，立望餓殍之滿道，如之何為君行此致也」とある。
 - 20) 『礼記・檀弓上』に、「賻布之余」「班諸兄弟之貧者」とある。賻布とは喪家におくるおくやみの金銭や布帛のことで、同じ『檀弓上』に、「既葬，子碩欲以賻布之余具祭器」とある。班は『説文』に、「分瑞玉，从珏，从刀」とあるから、分ける事である。
 - 21) この話は『礼記・檀弓下』に有る。
 - 22) 『礼記・檀弓下』に、「為粥与国之餓者」とある。
 - 23) 『管子・問篇』に、「問死事之寡嫗何如」「問国之棄人，何族之子弟也，問郷之良家，其所収養者幾何人矣」「問宗子之収昆弟者，以貧從昆弟者幾何家」とある。
 - 24) 『周礼・天官・小宰』に、「斂施之事」とある。
 - 25) 『周礼・秋官・大司寇』に、「以肺石達窮民」「遠近羸独老幼」「移民通財」とある。
 - 26) 『周礼・地官・大司徒』に、「掌均万民之食，而調其急」「掌邦之委積，以待施惠」とある。
 - 27) 『周礼・旅師』に、「旅師掌聚野之勸粟」「以質劑到民」「春頒而秋斂之」「興勸利𡵓」とある。
 - 28) 『周礼・大司徒』に、「令五家為比，使之相保，五比為閭，使之相受，五閭為族，使之相葬，五族為党，使之相救，五党為州，使之相調，五州為郷，使之相資」とある。

- 29) 『史記・平准書』に、「先富有而後推譲」とある。
- 30) 『礼記・坊記』に、「以此防民，民猶忘義而争利」とある。
- 31) マルクス『資本主義以前の所有制形態』
- 32) 『孟子，万章下』に、「在国曰市井之臣，在野曰草莽之臣，皆謂庶人」とある。
- 33) 『荀子』に、「分均則不偏（治），執斉則不一，衆斉則不使」とある。
- 34) 『荀子・主制』に、「勢位斉而欲惡同，物不能澹則必争，争則必乱，乱則窮矣」「制礼義以分之，使有貧，富，貴，賤之等，足以相兼臨」「養天下之本」とある。澹とは安靜なることを言い、『集韻』に、「澹沈澹菴」とあり、『史記，司馬相如伝』に、「澹沈澹菴」とある。
- 35) 『荀子・榮辱』に、「農以力尽田，賈以察尽財，百工以巧尽機器，士大夫以上至于公侯莫不以仁厚知能尽官職」「或禄天下而不自以為多，或監門御旅，抱關擊柝，而不自以為寡」とある。
- 36) 『韓非子・顯学』に、「今夫与人相若也，無豊年旁入之利，而独以完給者，非力則儉也，与人相若也，無飢饉疾病禍罪之殃，独以貧窮者，非侈則惰也」

「侈而惰者貧，而力而儉者富」「今上徴斂于富人以布施于貧家，是奪力儉而与侈惰也」「施予貧困」「欲索民之疾作而節用」「不可得」とある。疾疚は疾病に同じ。殃は『説文』に「咎也」とあり，わざわざのこと。

- 37) 『マルクス・エンゲルス全集』より。

〔付記〕

この論文の著者，趙世超先生は，陝西師範大学歴史学部の教授であるが，現在は同大学の学長という重責にある。専門研究分野は西周史で，特に周という国域を「国」と「野」という二領域に分けて，その離合の歴史の上から周代史を考えるという点に特徴がある。本論でも「余論」の第三章節，第四章節にそれに触れるところがあるが，1991年12月に，陝西人民出版社から『周代国野制度研究』と題する論著が出版されており，詳論はそれを参考にされたい。

本論文の翻訳に当っては，趙世超先生自から快く御承諾くださった。ここに記して謝意を表するものである。

(1995年9月21日受理)